

安定の影で痛められている人にお気づきでしょうか

教会では「愛すること」「赦すこと」「忍耐すること」「重荷を負うこと」などがキリスト者として大切であり、また美しい姿・美德として勧められます。確かに大切なことですが、しかしそれらの教えが、信徒と教職との関係や、聖書や諸儀式の中における性差別、教会・教職の権威についての問い、男女間の力関係などについて、疑問を抱いたり痛みを覚えたりしたとしても、それを直視せず、口を閉じさせてしまうこともあるのです。

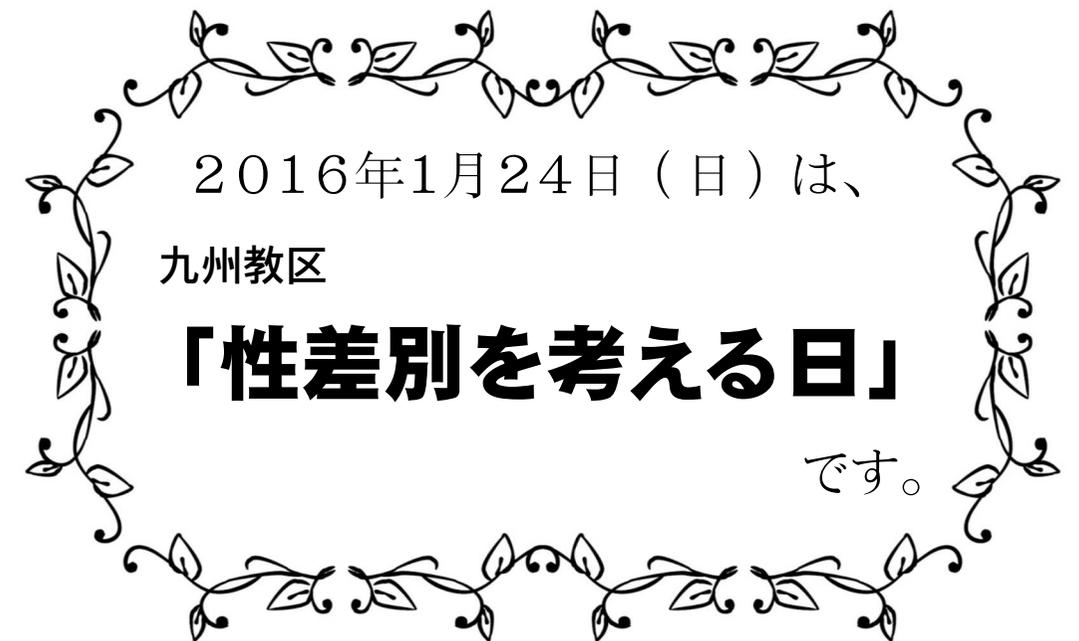
教職も信徒も、そのような問いに向き合うことよりも、それまで教会が大事にしていた安定した空気に逃げ込む方が、意外と安心を覚えるのです。教会生活の中で安定を得ることは大切ですが、その影で沈黙を強いられる人がいるのであれば、その安定とはいったい何でしょうか。そのような安定は突き崩されなければなりません。性差別はそんな身勝手な安定の影で繰り返されていくからです。

今年の「性差別を考える日」に、それぞれの教会・伝道所が性差別克服への内実ある第一歩を踏み出してゆくことができるよう、心から願っています。

◆もっと性差別問題について理解を深めたい人のために◆

九州教区伝道センター平和・人権部門は、各地区で性差別問題学習会を開催しています。また、セクシュアル・ハラスメント学習会への講師派遣についても、随時受け付けています。参加者が少なくてもかまいません。必要な際は、ご遠慮なく平和・人権部門までご連絡下さい。

2015年度「性差別を考える日」リーフレット



この日を覚えて
それぞれの教会で
性差別について
一緒に考えてみましょう

九州教区「性差別を考える日」毎年1月第4日曜日

日本基督教団九州教区

九州教区では1994年から毎年1月第4主日を「女性の日」として定めてきました。教会や教区でもっと女性の意見が反映され、存在が覚えられるために、常置委員会で制定されたものです。

しかしこの取り組みが進められる中で、「女性の日」が単に「女性の起用を求める日」とされてはいないか、そもそも「女性の日」とは何だったのかははっきりしない、といった意見が出てくるようになりました。

その後、「性差別を克服する」というテーマをリーフレットに記載し、教会の性差別体質を謙虚に認め、改善していくための取り組みである事を明示しました。

また2012年度からは「女性の日」を「性差別を考える日」と改め、今日に至っています。今年もそれぞれの教会で今一度、性差別について考えてみて頂きたいと願います。

なぜ教会で性差別について考えるのでしょうか

世の中には女性だから、男性だから、といった性差別があることはお分かりでしょう。しかしなぜ教会でも性差別について考えなければならないのか、と思われるのであれば、「教会には性差別はないのだろうか」と問い直してみてください。

聖書には、女は男の「助け手」として、男から作られたとあります。「だから女は男を補助するのだ」とは言われなくても、教会で行われる結婚式では多くの場合女性に「夫を助け、敬いなさい」と要求します。そもそも同性婚は論外とされ、男と女の組み合わせしか前提としていません。牧師招聘の際には女性よりも男性が望ましいとされる風潮があり、夫婦で牧師の場合は夫が主任で正教師、妻は担任で補教師のままが多数という現実があります。性的少数者については存在すら認められないことがままあるのが教会の姿です。これは紛れもなく性差別でしょう。

九州教区では牧師によるセクシュアル・ハラスメント事件が起きました。さらにその被害者が教会から疎外され、加害者である牧師の立場が守られるという二次被害まで引き起こしました。このことは教会内の性差別が根深いことを物語っているのです。

「まさかそんなことが…」と思われるでしょうか

「まさかキリスト教会で性差別があるなんて」、「まさか牧師さんがそんなことをするなんて」と思われますか。教会や教職に信頼を寄せる敬虔な思いからは、確かに信じ難いことかも知れません。しかしその思いは、時として認めるべき事実を認めず、問うべき問題を問わず、反省すべきことを反省せず、大きな過ちを生み出してしまうのです。

教会生活におけるお互いへの信頼関係は大切なことです。しかし「教会や教職は過ちを犯さない」という一面的な思い込みは差別の温床、隠蔽の温床を生み出すとても危険な考えになってしまいます。教会という組織も、信徒も教職も、共に不完全なものとして世にあるのです。「教会に性差別などありえない」という思い込みが、教会における性差別の実態を覆い隠してしまうのです。

しかし「まさか」という気持ちは危険であると同時に、性差別克服への入り口にもなり得ます。「まさか」から「もしかして…」という思いへ一歩進めることができれば、新しく見えてくるものがきっとあるでしょう。聖書、教理、教会、教職と信徒などについて、これまで当たり前とされている教会の習慣や常識に新たな視点が与えられることでしょう。

ここでお尋ねしますが、このリーフレットをお読みの皆さんは、教会の中で感じている様々な思いを素直に口にする事ができているでしょうか。伝統的な考え方に対して疑問を持つことも許されないような息苦しさをお感じになったことはありませんか。教会や教職に対して疑問を持つこと自体が許されることではない、と思わせるような雰囲気があるのなら、それこそが大きな問題なのです。問題に気づいたら問題だと言えること、そして一緒に悩みながらじっくりと課題に取り組み、互いの思いを分かち合えることのほうが、教会にとって大切な事柄ではありませんか。

